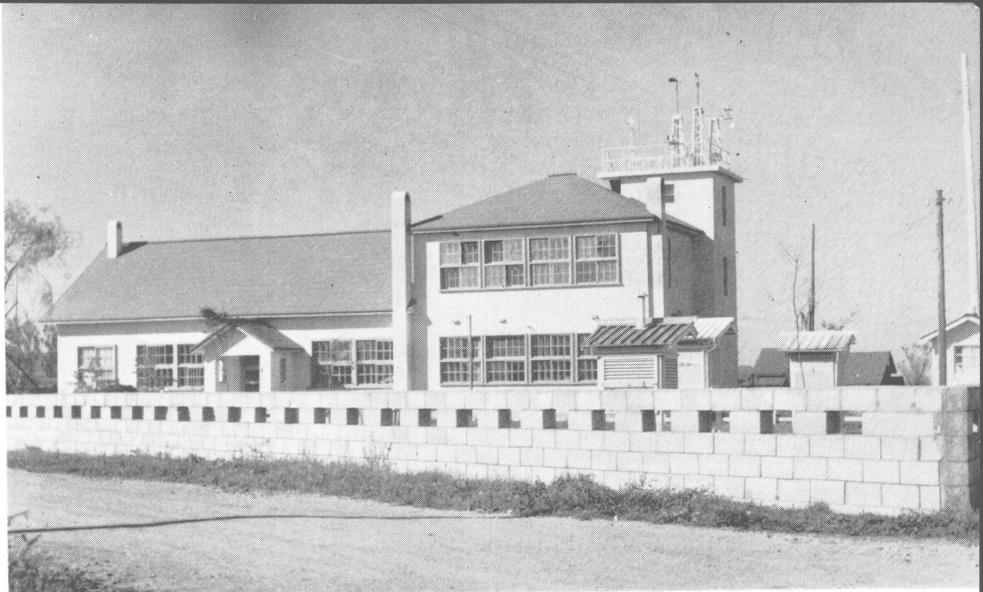


# 地方だより

— 網走測候所 —



網走といえば、なにか妙な先入観念が浮んできて、本州方面の人達には、はじめちょっとなじめない人も多いらしい。

ここ網走は日本のはて、不思議に穏やかな、紺碧のオホーツク海に臨む、起伏ゆるやかな緑の平原に、牛とサイロ、そしてポプラの点景する中、大小数多くの湖沼をいなく——ちょっと北欧を想わせる牧歌的の詩情ゆたかな明眉の地、そして一步、市街地に入ると、先ず目をひく10キロ放送の頂冠式の大アンテナが、整然と美しい街なみと共に旅行者に、この街の高い文化面をのぞかせる。

旅行者は、やがてこの異国的なオホーツクの夢を忘れがたく、続くコースをたどって、あ的美幌崎を登り阿寒国立公園の大影観に向う。

はるか昔、北方民族によって、この辺一帯が旧オホーツク文化圏の中心として、栄えたことが、隨所に発掘される数々の遺跡からいわれているが、私はこの土地の気候が、この事実を裏づけているものと考えている。

いま、北限地帯とはいえ、秋になると一万町歩にも近い黄金の穂が波打たれ、またカナダ小麦にも劣らない良質の麦類が、はるか地平原に続き、さらに薄荷、亜麻、甜菜等の特作物を生む、この温めないいわゆる北見気候ともいふべきものが、かつての民族発展、文化圏の構成に

あずかって力があつたであろう。

しかし、冬の網走は厳しい——だがまた楽しいものがある。

厳冬に入って、オホーツクのはてから流れてくる大小無数の氷岩、氷丘、氷塊が押し重りあつて、全海域を圧して、一望はてしない大流氷原を現わす。その景観は網走にのみ見られる、壮観の一語につきるだろう。とても本州の人達には想像もつくまい。たしかに観光の圧巻と思う。

この網走に、明治22年8月、測候所が創設され、以来北門の気象に、多くの先輩が血と汗を流した管内民の気象災害からの守りを私達はうけついでここに66年、まことに永いかくれた業蹟といえよう。

網走測候所に課せられた使命は、むろん府県区測候所としての地方中核的の任務の外に、とくに研究テーマとして、この流氷の調査がある。数年ごとに宿命的に襲われる北日本の凶冷と、このオホーツク流氷の問題、つまり冷害凶作の原因の一説、海水説の発展と究明であろう。測候所の長い流氷観測資料からの、興味ある一つの結論も出ているが、なおひき続いて今後の充実した、詳細な観測、調査の必要が大きい。それには大型砕氷船による観測、あるいは航空機等による広範囲の流氷観測等が急務で、国家的事業としても是非、採り上げられなければならないと思う。と同時にまた基礎的研究として氷の物理の研究も、現場の調査と平行して、より以上進められなければならない。

流氷現場を受け持つ、網走測候所のこれからの、いろいろ苦難の道も覚悟して、いま17名の職員が、縁下的だがしかし、昨年成った新庁舎で、軒昂としている。

(写真と文 二宮三郎)

編集委員：伊東強自、神山恵三、  
村内典興、根本順吉、奥田穰、  
大井正一、矢野直、吉野正敏、  
荒井隆夫、藤原寛人

